

《公開講演会記録》

プーチン復帰の背景とロシアの今後

ジャーナリスト、元NHKモスクワ支局長 小林和男



私はロシア関係を長く扱っていますが、長いことが必ずしも正しいとは限りませんので、注意して聞いていただきたいと思います（笑）。プーチンが7日に大統領に就任しました。これから6年間、プーチンがロシアを率いていきます。

彼はさっそく、5月18日、19日に行われるG8サミットは「すっぱかす」と言いだしました。早くもいろいろ騒がせています。今日は最高のタイミングです。今日は4つのポイントにしようと思います。1つは、ロシアについての報道が表面的で、ロシアが分からないという状態が続くのは、日本がロシアとの関係を考える上で非常に不幸なことですので、まずマスコミなどメディアの問題を取り上げます。

2つ目は、昨年の6月まではメドベ

ジェフが大統領候補になる予定だったのですが、それが変わってプーチンが再登場した背景には何があるのか。実はこれには日本が多少関わっています。

3番目は、プーチンはすでに12年の長期政権にありましたから、これからやりますと18年になります。この18年の長期政権が、どれだけ強みになり、また弱点になるのか。

4つ目は、これからの日本との関係で、北方領土がどうなるのか、です。

ロシア報道の問題点

みなさん、プーチンのことはおそらく嫌いでしょう。プーチンといえば独裁者だ、KGBだと。それはその通りですが、昨年、NHKのBSで面白いドキュメン

タリー番組が出ました。タイトルは「ロンドングラード」。ロンドンにロシアの金持ちたちがほとんど逃げているという話です。ロシアでこの10年の間に大金持ちになった30歳そこそこの若い男が、プーチンを批判したためにロシアにいらなくなつて、イギリスに亡命を求めているという話です。放送が終わってから、「いやー、いい番組だったね」と言われました。でも、これは面白いに決まっています、最初からプーチンを悪者にして材料を集めているわけですから。

「ロシアはたいへんな国だ」「プーチンというのとはんでもない男だ」という結論が出るわけですから、実に明快です。しかし、この話で何が重要かといえば、その若者が10年そこそこでなぜロシアの有数の大金持ちになれたかということ



プーチン大統領就任式

す。その理由を知らないのと、この番組の本質に迫れないのです。大金持ちになった経緯を知ると、何だそんな話かということになりますから、番組制作者はそっちは全部捨てるんです。大金持ちになったという事実だけを伝えて、その男がプーチンを批判したことを中心にする。

その批判は何かというと、プーチンが大統領時代に、地方の知事を任命制にしたことです。民主主義に反するという批判をしたために、ロシアにいられなくなっただという結論です。

話はおもしろいですが、本当にプーチンのその政策を批判したためにロシアにいられなくなったのでしょうか？ 真相は何だということを取材しないで、「やはりプーチンは悪者ですね」で終わり、大金持ちができた背景、ロシアの真相に

迫る部分は伏せられてしまっています。

昨年11月、12月に反プーチンのデモが吹き荒れました。しかし、事実をいえば、そのデモのおかげで、プーチンの支持率は上がりました。10%上がって60%を超え、その勢いのついで、3月4日の大統領選挙では、有権者の有効投票数の64%の票を獲得して、1回目で当選しました。

問題は批判を受けているのになぜ人気が出たのか、ここにロシアという国の取材のやりがいがあるわけです。

なぜまたプーチン？

2番目のポイントは、なぜプーチンが出てきたのかですが、本当はメドベージェフが出る予定で動いていたのです。皆さんはメドベージェフのことをプーチンの操り人形で、力のない男だと思っているでしょうが、事実は違います。彼は相当なやり手です。プーチンは彼を信頼して首相の座をまかせて、メドベージェフはかなりのことをやりました。

典型的な例は、誰もが絶対できないと言っていたことをやりました。ソビエトからロシアになって一番栄えた産業は何だと思えますか？ モスクワ、サンクト

ペテルブルグで。それは「カジノ」です。オペラや小説で分かるように、ロシア人の博打好きは有名です。「ロシアンルーレット」みたいに、命をかけても博打をやる国民です。カジノは大産業になりました。モスクワには500軒もありました。お金は落ちるし、40万人も雇いましたから、大産業にはなりましたが、やはり問題はありました。博打は働く意欲を失わせますから。

そこでプーチンからメドベージェフになった時に何をやったかというと、2008年にこれを全部閉鎖させようとした。カジノはヤクザの世界で、時には警察も絡んでいるわけですから、国会議員も含めて誰もが「そんなことができるわけがない」と言いました。それを彼はやりました。

どうやったかというところ、あの広いロシアに4カ所、特区を決め、そこはみんなさびれてこれから発展するにはどうすればいいか、みんな考えあぐねている所、そういう地区だけを指定し、カジノを造らせ、一方で既存のカジノをつぶしました。それも殺されずにやったのは大したことです。

そういうことを日本人はあまり知らずに、何だか若くて弱弱しいやつで、プー



北方4島

チンが後ろで糸を引いているみたいに言っています。これも報道の誤りです。そのメドベージェフを次の大統領にしようという事で動いていたのですが、人気という問題が政治家にはあります。メドベージェフの場合、実績はあるのですが、支持率の調査をやると、プーチン首相とはどうしても10%は離されます。メドベージェフは何とかしないといけないと考えていた時に、日本の国会が、メドベージェフに人気が出るいいアイデアがあるぞと教えてやったのが2009年のことです。

2009年の7月2日に、一つの法律が国会を通りました。それは「改正北方領土問題等解決促進特別措置法」です。

提案者は当時野党だった民主党の前原誠司さん。法律のポイントは2つあって、1つは北海道に公共投資を増やす。もう1つは、「北方領土は日本の固有の領土である」と、法律で決めたのです。

ロシアは猛烈に反発しました。我々が半世紀以上、実質的に施政権を行使している地域を、日本は国会の一片の決議で、自分の固有の領土にしてしまった、これはけしからんと。この法案が上程された段階から、すでに、メドベージェフ大統領は日本に対して直接、それから外交ルート、メディアを通じて、警告をしてきていました。

その警告は、もしこの法律が通るようなことがあれば、日本とロシアの領土問題の話し合いは進まなくなるぞという内容です。メドベージェフは、サンクトペテルブルグ大学の法学部の出身、しかも法学博士で、法律を教えていた人物です。法的な頭の構造をしているといってもいいと思います。彼の発想では、ロシアと日本は領土問題ありということと合意して、話し合いをしようとしているその時に、日本が法律で、「日本の固有の領土だ」と決めてしまっただけで話ができないという事になります。そういう形で抗議して警告をしてきたのですが、メディア

は無視する、政治家は聞く耳を持たない、外務省は重要性を理解する能力がなかったということでしょうか。

この法律が通った時に、ロシアの国内はわーっと沸きました。その理由には、ロシアの特殊事情があります。

北方4島とアラスカ

話は150年前にさかのぼります。ロシアでは皇帝や指導者で、評判のいい人は、皆、領土を広げた人です。その一人がエカテリーナという女帝です。ヴォルテールの友達で、エルミタージュを始めたのはこのエカテリーナ女帝です。それはロシアを文化国家にしなくていけないという使命感でやったんですが、もう1つ、領土に対する意欲の強い女性でした。今から150年前に、黒海が欲しいとトルコにまで手を出して、イギリス、フランスと戦争になったのが、ご存知クリミア戦争です。

3年間の戦いで、イギリス、フランスに死者7万人、ロシアにも10万人に死者が出て、セヴァストポリの攻防戦でロシアは敗退する。戦争に負けると、何が問題になるかというと、戦費の負担です。次の次の皇帝のアレクサンドル2世は

開明派の皇帝でした。

そのアレクサンドル2世が戦費を何とかしなくてはいけない、いけないものを売ろうと思ったわけです。それがアラスカです。日本の4倍、152万平方kmあります。アラスカは1741年に、ベーリングというロシアに雇われたデンマーク人が、ベーリング海峡を発見して、通って南下して、その後ロシアの狩猟の毛皮商人たちが入って、教会もできて、ロシア領になっていた土地でした。

これを売ってしまおうと、声をかけたのがアメリカです。アメリカの当時のスウオード国務長官に声をかけても最初はいいらないと、話は進まなかったのですが、結局、アメリカはその頃、イギリス、フランスと対立関係にあり、ロシアも同じでしたから、敵の敵は味方だ、ロシアから買ってやろうとなりました。そして720万ドル、1平方km当たり5ドルで買い取りました。

アメリカではものすごく不評でした。スウオードが買わないものを買い込んだと。当時アメリカはアラスカを「スウォードの白クマ動物園」「スウォードの巨大な冷蔵庫」と呼んだほどでした。ですが、直後に何が起こったか。金が見つかった。ゴールドラッシュです。石油、天然ガス

が見つかって、資源の宝庫、今はレアアースの宝庫です。

この一件がロシアにとってもものすごくトラウマになっています。ロシアの教科書では、「帝政ロシアの愚かな行動」とされています。共産主義時代の教科書、今の教科書もそうですが、いったん獲得した領土を手放すことは、いかに愚かなことであるかということ、子どもころから、叩き込まれるわけです。日本でも、領土というのは、愛国心、ナショナリズムの基になっていますが、ロシアの場合はアラスカです。

そういう国民の前で、日本の法律が通ったわけです。ロシアは猛烈に反発しました。それにメドベージェフは気づき、この問題を取り上げれば、自分の支持率は上がると思っただけです。それで2010年、選挙に合わせて、今までの最高指導者も足を踏み入れたことのない、北方四島の国後島に初めてメドベージェフが3時間いた。当然メディアは伝え、ロシア国民はよくやってくれたという話になる。その背景にあるのは、ロシア国民の特殊な感情です。

結果的には、日本の国会が、メドベージェフに、北方四島に行ったらいいことあるよ、と教えることになってしまいま



国後島のメドベージェフ大統領

した。その後、日本は「けしからん」と騒ぎますが、メドベージェフの支持率は、跳ね上がり、プーチンとの差は、誤差の範囲の1%まで近づきました。昨年は、年が明けてすぐ、セルジュコフ国防大臣を送りこむ。港の建設をやる。軍事費用を増額するようなことを次々に言って、ロシア国民の愛国心を刺激することをやりました。

究極のアイディアは、一昨年、アメリカでつかまったロシアの若くて美人のスパイ、アンナ・チャップマンでした。プーチンの子飼いです。アメリカとロシアの間ではスパイをしていることを認め合っていますから、オバマ大統領とメドベージェフ大統領はすぐに電話で会談をして、

アンナ・チャップマンとロシアが捕まえていた、アメリカの大物男性スパイをウィーンのシヴヴェヒャート空港に連れて行って、交換して、両方とも帰国してチャラにしました。何の問題にもなっていない。スパイはやるもの、やらないやつは無能という図式が両国でありますから。

若くて美人のスパイですからロシアでは非常に人気があります。メドベージェフは彼女を北方四島に送りこみ、北方四島に国旗を立てさせようと考えました。そうすればメディアが追いかけてくれて、支持率は上がるといふ計算をしたと思います。

アンナ・チャップマンも「北方四島へ行って、旗を立てます」と言っていたのですが、あることが起きてその目論見はずれました。それは3・11です。日本人の行動に対する評価が高まっている時に、彼女は「行きません」と言い出したのです。その時の彼女の言葉がすばらしいです。「日本人というのは、ものすごく真面目で正直です。私は北方四島には行きません」と言いました。

それでメドベージェフの目論見はぼしょりました。支持率は、また前の通り、プーチンと10%の差がつき、後塵を排すという形になりました。ある意味では、メド

ベージェフに策を教えたのは日本、それを砕いたのもやはり日本の大悲劇ということになります。そして案の定、9月にメドベージェフが自分は大統領選に出ず、プーチンを指名するということになったわけです。

プーチン人気と長期政権の問題

プーチンが大統領選に出ることになってから、反プーチン、反独裁制の批判が吹き荒れました。ところがです。周辺を強力に固めて、その周辺は必ずしも正し



反プーチン・デモ

い人たちではなく、選挙違反もいっぱいあったに違いない、にもかかわらず、とかえってプーチン人気は上がりました。その理由をどう考えますか。

日本でも、ある会社にものごく強力なリーダーが現れて、その会社を大きくし、国有地の払い下げを受けたり、スポーツなどいろいろな世界に手を広げて、その間、いろいろな物議もかもしつつも長期政権が続くという例があります。

プーチンの場合、選挙違反もあったろうし、部下の汚職もあったろうし、いろいろなことがあった。日本の会社でいえば、社会的な透明性とか、社会的な約束に対する裏の話などいくつもの問題を社員は皆知っている。ロシア国民もプーチンのことを知っている。プーチンの悪い面も知っている。でも、だからといって透明性があって、若くて、極めて論理的に物事を考え、世間の受けもいい人物を指導者にもってくるのがいいのか、ということにはならない。

やはり実績があって、この人物にすぎなくて、自分自身も上にながってきたわけだし、その人物にすがってれば何とか頼りになるぞと、いうことががちです。そういうことが、ロシアでは国の規模

で起きているということです。問題がないとは誰も思っていない。知っている、けれど、エリツイン大統領時代の混乱から、国民の生活を引き上げ、政治を安定させ、世界から軽蔑されていた国を、世界から恐れられる国に、たった8年間でした男です。

懐具合でいえば、プーチンが2000年5月7日に大統領になってからの8年間、国民の実質賃金は、2006年に10%を割ったことが一度だけありますが、ほかの年は毎年、10数%から20%近く上がりました。そして街の様子もがらりと変わりました。多少汚れているようが、やり方があこぎであろうが、それでもやっぱり彼を頼るといえるのは、日本の会社の例を考えても非常によく分かります。

というわけで、これから6年間プーチンがやっていくわけですが、問題は次の後継者が混乱をもたらさないか、会社が分裂するような、勢力争いがあちこちで吹き出すような話になるかならないか、ということだと私は思います。

長期政権という問題があります。プーチンは8年間、大統領をやり、4年間、首相をやり、実質的に12年間、政権の座にあった上に、あと6年間は保障されます。辞めさせる方法はないです。

となると、特にゴルバチョフらが警告しているのが、長期政権の弊害です。彼は共産党の内部で、長期政権の弊害をつぶさに見てきました。ゴルバチョフはブレジネフの長期政権時代を「停滞の時代」と呼んでいるのですが、その前のフルシチョフ時代から話をしたほうが分かりやすいと思います。

フルシチョフ首相はウクライナ出身の炭坑夫ですが、ものすごくおもしろい男で、みなさんにはどんなイメージがあるか分かりませんが、一番最後の見せ場は1962年秋のキューバ危機。キューバ



フルシチョフとケネディ

にミサイルを運び込んでアメリカに対抗しようとして、ケネディ大統領に抵抗され、失敗に終わりました。しかし、その前にはたとえば原子力発電所を1954年に最初に稼働させたのが彼です。それから1957年10月4日に最初の人工衛星、スプートニクを打ち上げさせたのも彼です。アメリカはこれにびっくりしてアポロ計画に入るわけです。音楽の分野でいうと、すぐれた音楽家を輩出しているチャイコフスキーコンクールは1958年に彼が始めたものです。

フルシチョフのやってきたことは、ソ連の権威を高めようとしたものですが、ミサイル危機をきっかけにして、ブレジネフが、彼を亡き者にしようとして、彼を失脚させて、ちょうど東京オリンピックが開かれていた1964年10月、彼が黒海の沿岸の別荘にいる時に、彼を幽閉して、それから完全に彼の姿は消えてしまいました。

このフルシチョフの後、ブレジネフが政権の座について、何と18年間、政権の座にしがみついたんです。1982年に死ぬまで。その間、新しい空気は止まり、何が起ころるかという、ネガティブな話ばかりが広がる。たとえば、ロシアの国力を一番失わせたアフガニスタンへの介

入です。

1979年12月27日に突然、ソ連軍がアフガニスタンに侵攻して、その翌年がモスクワ・オリンピックだったんですが、アメリカの圧力で、日本など数カ国はボイコットしました。いろいろな悲劇を生んだアフガニスタン侵攻ですが、そういうことばかりが続いて、結局ソ連の進歩はそこで止まりました。だからブレジネフ時代の18年間は、国威を発揚するものは全て姿を消してしまいました。

ゴルバチョフはそれを中から見えています。彼に「何で改革を始めたんですか？」と聞くと、「実は最初にトップ10人ほどの意思決定機関である政治局に入った時に何をやってたかという、パンティーストッキングをどうしたら増産できるかという話だった」と言うんです。当時、日本では100円で丈夫なパンティーストッキングができていました。何でソ連がパンティーストッキングの増産の話をしていたか。それには理由があって、外国人はパンティーストッキングをおみやげで持っていけば、女の子にもてた。

つまりソ連はパンティーストッキングもできない国、外国ではすばらしいパンティーストッキングがただみたいにくさんある。情報統制していますから、外

国の姿は本当には分からないわけですが、こういうところから、やはりソ連はおかしいぞ、という疑念を国民に起こさせるわけです。

ゴルバチョフは最初に参加した政治局会議で、パンティーストッキング増産の話聞いて、これはもうこの国を改革しなくてはいけないと思ひ、シェワルナゼ（後に外相）とソ連を変えていこうと図るようになった、と私に話しています。

ゴルバチョフは、去年の暮れにデモがあった時に、ゴルバチョフ自身は参加しませんでした、メッセージを出して、「プーチンさん、やはり出ないほうがいいよ」と言いました。理由は、長期政権、18年のトラウマです。長くなるとうるなことはないよ、あなたもちゃんと知っているだろう、ということでした。問題は



ブレジネフ

その停滞の時代がこれからやってくるかどうかです。

プーチンに会った

私はプーチンに会ったこともないまま、相当な悪口を言ってきました。プーチンは、私がロシアから帰って出てきた人なので、会ったことがなかったのです。彼はKGBだし、目つきも悪いし、いやな人が出てきたなあと、悪口を言っていたのですが、ある時、モスクワに行きましたら、若い女性が歌をうたっているのです。「私はプーチンのような男が欲しい」という歌でした。当時、プーチンは西側では評判が悪かったが、国内では人気でした。そこで、これは会ってみなくてはいけないと思いました。

といっても、すでに退職者ですから会うことは困難だと思っていました。しかし、おもしろい人物がいました。ロシアの駐日大使で、パノフという人です。この方は腹が据わっているというか、1991年8月19日に反ゴルバチョフのクーデターが起こった時、彼は「このクーデターは失敗する」と言い切りました。ロシア中が皆、どっちにいったらいいか分からないで、日和っていたのに彼は外交

官の集まった席で、オーストラリア大使が、「クーデターが成功して、またひどい共産主義の時代に戻るぞ」と言うと、パノフ氏は「これは失敗します」と言い切りました。「あの顔触れでは成功するわけがない」と断言したのです。2日後に彼の予測は当たりました。そして駐日大使になるのです。

その大使と私は、2002年の冬、奥志賀ヘスキーに行つて、山小屋でキャビアとウォッカをしこたま食べたり飲んだりした後、大使に「(プーチンに)会わせてくれ」と頼みました。彼の返事は「そうですね。やってみますかねえ」でした。しかし、こういう話は次の日の朝に大体忘れられるものです。

ところが、それから半年後の5月24日の金曜日。夜中にパノフ氏から電話があつて「小林さん、ほらあの話。1時間くらいなら、大統領がお会いすると言っていますが、明後日の月曜日です、間に合いますか」と。間に合うも間に合わないも、すっ飛んで行きました。

会いましたら、プーチンはいきなり「ガキのころは不良でした」と言うのです。貧しい家の出身で、13歳の時は、街でケンカばかりしていたと。街の論理は、勉強ができるとか、音楽ができると

か、人柄がいいとかは全く関係がない。本当に物理的な力がものをいう。彼は168センチでロシア人では小柄です。そこで力をつけるために何をやったかという、柔道です。

その柔道の先生がいい先生で、柔道というのは「礼」だと、13歳の悪ガキに言ったそうです。後で大統領になるくらい的人物ですから、感性がよかったのでしょう。「それで私は助けられた」と言いました。もうケンカをしなくても、マットの上で鍛錬をして、その成果をルールに従つてマットの上で見せれば、力を見せることができるかと分かつて私は助けられた。もし柔道と出合っていなければ、今、私はどうなっていたか分からないということです。

報道官がしきりに私に「時間だ」と合図しますので、「そろそろ終わりにしましょうか」と言いましたら、プーチンは「いや、待て、私について来い」と言うのです。ついていくと柔道の道場がありました。そして嘉納治五郎の銅像がありました。それに毎日挨拶をするそうです。彼は「柔道は日本が生んだ単なるスポーツではなく、日本の歴史、文化が生み出した哲学だ」「柔道で耐えることを教わった」と言いました。最後に彼は「柔道の



プーチンと小林さん、右は嘉納治五郎像

最高の徳目は……彼は漢字二文字の日本語で言いました、「修身だ」と。そこでこの男についての見方は今までとは変えなければ間違うぞと思いました。

プーチンが日本に来て、講道館で「乱取り」をやった時に、講道館は彼に敬意を表して、名誉六段の赤と白の帯を贈呈し、これを着けて「乱取り」をしてくださいと言ったところ、彼は「ありがたく頂戴いたしますが、今はこの帯を着けません。私がこの帯にふさわしくないことは、私が一番よく知っています。私が鍛

鍊を積んで、もしこの帯が自分にふさわしいと分かった時に、着けさせていただきます」と言ったので、講道館の人たちは大感激でした。

ここまでは、プーチンのネガティブなイメージだけでなく、何か別の要素を持っているのではないかという意味で参考にしていただく話です。それが長続きするかはどうか別問題です。

覚悟の問題

ところで、2003年5月26日に、私がプーチンと会ったその日は、中国の胡錦濤総書記が、ロシアを初めて公式訪問して、大統領公邸で最初の公式会談をする予定になっていました。部屋を出て行ったら、中国人記者たちがいっぱい待っていました。

こういう際、プーチンと胡錦濤は互いに相手の目を見るわけです。そこでこれは信頼できる、この男なら信頼できると確信を持てば、二人は約束事をするわけです。もちろん報道では「互いの友好親善を深め、経済を発展させ、戦略的互恵関係を」と、そういう発表になります。発表しない部分があるのです。

この時は、150年間、ロシアと中国

が解決できなかった問題を私たちがやるう、と決めました。その後の報道を見ると、二人の往來の度ごとに「戦略的互恵関係、互恵的パートナーシップが増進した」と発表があり、実際に経済的な発展もあるのですが、2年後に何があったかという、本当にある日突然、150年間解決しなかった領土問題が解決しました。これが最終結論です。

日本の領土を返してもらいたいと思います。しかし、領土がデモや署名運動や広報活動や集会によって解決したという話はありません。やはり信頼関係のある政治家同士、トップの政治家同士がやるぞと決めてかからなければいけない問題です。この時、中国にもロシアにもものすごい不満がありました。今まで住んでいた所を追われる人たちがいるわけですから、不満が残るのは当たり前です。それが抑えられたのは、国民の信頼があった、強力なリーダーシップがあったという事です。幸いなことに、プーチンが今度出てきて、国民のサポートは受けているという事は、その背景がどうであれ、いいことです。

あと問題は日本側に、野党とか右翼とかがいろいろ騒ぐのを、ちゃんと覚悟して、腹をくくって、俺の仕事としてプー

チンと一緒にやるぞ、いう決意を持った人間が出てくるかどうかです。今回、自民党の森喜朗さんを特使としてモスクワに出すということですが、要するにお祭り騒ぎではないですか。プーチンはしゃべ返しのようには、そんなのには乗らないよ、という感じで、ワシントンには行かないよと言いました。鈴木宗男さんが考えたのはつまり森さんに親書を持たせて、アメリカ、キャンプデービットでのG8で野田首相とプーチンの話し合いの先鞭をつけるといったことなのですが、スケールの小さいことだと思います。

日本に右翼なり、野党の政治家なりを説得できる人物が、覚悟して出てくれば、日本にとってチャンスはあると思います。と言って、私は絶望的だと思っていますが。

(5月11日・講演会)

講師略歴(こぼやし かずお)

1940年 長野県生まれ

東京外国語大学卒業後NHK入局

モスクワ支局長、解説主幹など歴任

菊池寛賞、ギャラクシー賞受賞

著書『エルミタージュの緞帳』『1プードの塩』など